

言語発達における語順パラメータについて

岩立志津夫

(信州大学教育学部)

【目的】

本発表の目的は、①これまでに得られた岩立の研究結果などから語順中心の段階説を示すとともに、②その段階説を言語学習可能性研究の立場（特に、パラメータ理論）から理論的に検討することにある。最後に、補足的に教育との関連についても述べる。

【資料1—言語学習可能性研究とパラメータ理論—】

言語学習可能性(language learnability)の研究は言語学者 Chomskyの言語獲得理論の影響を強く受けている。言語学習可能性の代表的研究者である Wexler (1982)は、言語学習可能性の研究を三つの概念(①文法のクラス[a class of grammars]、②文法のための情報[information about a grammar]、③言語学習手順[a language-learning procedure])で説明している。Wexlerによれば、人間にとって学習可能な文法はクラス(集合)を構成し、各自然言語(例えば、日本語)の文法はそのクラスの1つの要素である。さらに、学習可能な文法クラスの中のある文法を学習するには、その文法に関する情報を必要とする。そして、その情報から特定の文法をつくり出すのが言語学習手順である。

このWexlerの考えは、岩立の視点から、次の二つの式にまとめることができる。

式1	学習可能な文法集合 = 自然言語の文法集合 + 未知だが学習可能な言語の文法集合
式2	input (文法のための情報)
	↓
	一定の手順 (言語学習手順)
	↓
	output (文法のクラス)

式2の中の一定の手順(言語学習手順)として、現在盛んに研究されているのがパラメータ理論である(Hyams, 1986)。パラメータ理論によれば、人間には生得的に普遍文法(UG: Universal Grammar)が備わっている、そして、この普遍文法はパラメータ形式をとる。パラメータ形式とは次のように図示できる。

P1=aa (aa,bb,cc)

P2=+ (+,-)

P1パラメータはaa,bb,ccの三つの値をとる可能性があり、ここではaaがとられている。P2パラメータは+,-の二つの値をとる可能性があり、ここでは+がとられている。パラメータ理論はパソコンソフトという「ユーザーカスタマイズ」に似ている。実際に研究されているパラメータとしては、主語の有無に関するAG/P-R0パラメータがある。パラメータ理論の長所は前もって選択範囲を決めておくので能率がよい点(Chomskyは、これで学習速度の速さを説明しようとする)、短所は選択の範囲が限定されてしまう点である。

【資料2—語順中心の段階説—】

岩立(1980,1981)の研究から、語順に関する言語発達には次の四つの段階の存在が考えられる。

段階1	語順のない段階
段階2	動詞毎に語順が決まる段階(2歳前後)
段階3	特定の格(「ガ格」や「ヲ格」など)によって語順が決まる段階(3歳前後～5歳前後)
段階4	格助詞による、言語理解や発話が可能になる段階(5歳前後～)

段階2の存在は表1の結果などから推測される。表1によれば、動詞「かく」と「食べる」は共通ではないが、独自の語順を持っている。

段階3の存在は表2の結果から推測される。表2によれば、ジローは2歳台ではGa+0+Vの語順傾向が不明確だが、3歳台になるとその傾向が明確になる。すなわち、段階3に移行している。言語理解では、語順ストラテジーが現われる(岩立, 1981)。すなわち、具体的には0+Ga+VをGa+0+V語順と取り違える間違いが多くなる。

段階4の存在は他動詞文の理解の正答率が言語水準があがるに従い高くなることから予想される(岩立, 1981、資料は省略)。

【資料3—語順が重要でない言語獲得—】

資料2での通り、日本語の獲得に際しては語順がある役割をはたしている。しかし、言語によっては様子が違う。Slobin(1982)によれば、トルコ語の獲得では、①語順ストラテジーが認められないし(SOVとOSVの間

に差がない)、②日本語児に比較して低年齢の段階でOSVの理解が正確である。

【考察1--語順パラメータの存在--】

最初に、語順パラメータに関する提案をする。

提案1 語順パラメータは生得的なパラメータである。

提案2 語順パラメータはオプションである。

提案3 語順パラメータの値は3種である。

(値1 強い語順

値2 弱い語順

値3 語順なし)

補足提案

日本語児の場合は、①語順パラメータをオプションとしてとり(提案2)、②値は「語順なし→強い語順→弱い語順」と変化する(提案3)。

提案1の理由は、日本語児の場合ほとんど、なんらかの語順が認められるからである。

提案2の理由は、トルコ語児(他にフィンランド語児やロシア語児でそういう報告もある)のように、語順の役割が弱い場合があるからだ。

提案3は、上記の段階説からの推定である。

これらの提案は、勿論作業仮説の域をでない。しかし、このような理論的提案から新しい研究が現われて来るかもしれない。

【考察2--生得論と教育--】

パラメータ理論のような生得論は、「教育可能性を否定する」ということで非難されることが多い。これに対して、比喩を示して反論したい。

人間は二つの手を生まれながらに(生得的に)持っている。そして、人間文明はこのことを前提にできあがっている。例えば、フルートは持ち方から穴の数まで人間の手を前提に設計されている。しかし、だからといってフルートを学習することの多様な可能性が否定される訳ではない。同じことがパラメータ理論にもあてはまる。

【文献】

Hyams, N.M. (1986) Language acquisition and the theory of parameters, D.Reidel P.C.

岩立志津夫(1980) 日本語児における語順・格ストラテジーについて 心理学研究

岩立志津夫(1981) 日本語児の初期発話における語順・格ストラテジーについて 教育心理学研究

Slobin, D. (1982) Universal and particular in the acquisition of language. In Wanner & Gleitman(Eds.) Language acquisition, Cambridge U.P.

Wexler, K. (1982) A principle theory for language acquisition. In Wanner & Gleitman(Eds.) Language acquisition, Cambridge U.P.

表1 「ガ格」「ラ格」「動詞」
の語順(ある男児2;1~2;8
の発話合計)

	カク	タベル	ツクル	コホス	カウ	計
Ga+O+V		11	3		2	16
O+Ga+V	6				1	7
O+V+Ga			2	1		3

岩立(1980)より

表2 「ガ格」「ラ格」「動詞」の語順
(5人の幼児の、各々の発話合計)
ユ-コ アキコ フミエ シ'ロ- シ'ロ- タロ-
(2;5)(2;7)(3;7)(2;5)(3;6)(3;9) 計

	ユ-コ	アキコ	フミエ	シ'ロ-	シ'ロ-	タロ-	計
Ga+O+V	24	11	12	6	11	15	7
O+Ga+V	2	1	2	4		1	1
Ga+V+O	1	3	3				
O+V+Ga	2		1	1			
V+Ga+O							
V+O+Ga			1				

岩立(1980)より